

大阪万博を展示する

― 収蔵品と進行中のプロジェクトについて

山崎愛

一九七〇年に開催された日本万国博覧会(以下:大阪万博)は、アジアで初めて開催された国際博覧会だ。会期中の来場者数は約六四二二万人。単純計算をすれば、当時の日本国民の六割以上が訪れたことになる。会場の中心となるシンボルゾーンには岡本太郎が中心となって手がけた太陽の塔と丹下健三の大屋根が構え、菊竹清訓の設計によるエキスポタワーや奇抜なパビリオン群は、明るく輝かしい未来を体感するのに十分であった。経済成長の中で進歩の歌を合唱してきた私たちが辿り着いた場所。大成功に終わった大阪万博の跡地は、万博記念公園として整備され、現在も人が集う場所となっている。

この公園内にある「EXPO'70パビリオン」は、大阪万博の鉄鋼館を改装して二〇一〇年にオープンした記念館だ。その特性上、展示内容は大阪万博とその周辺の事象に限られる。収蔵物はパビリオン・パンフレットや模型、映像、写真の他、スタンブ帳や絵葉書などのお土産品、VIPを中心に配布された記念品、ポスターやソノシートなどの広報物、ユニフォームなど多岐に渡る。公式マークが蓋にあしらわれた鍋や表情がどうもおかしい太陽の塔の文鎮など、当時はありとあらゆるものが公式・非公公式関わらず大阪万博に関連付けられ制作・販売されたのだろう。その一つひとつに時代背景や関係者の思惑が感じられて面白い。

当館の収蔵品は大きく三つに分類される。常設展内の展示資料の基礎となっているのは、大阪万博を主催した日本万国博覧会協会が所蔵していた資料だ。メインテーマ設定や会場基本計画のための会議録、国内外向け広報資料やプレスリリースなど会期前

のものから、会期中の業務日報、記録写真、新聞記事、また各パビリオンの報告書や土地利用計画に関するものなど、種々雑多な資料を所蔵している。二つ目は閉幕後に外国パビリオンから寄贈を受けた展示品だ。現在では輸入規制を受けている素材を使用した資料もあり、民族的にも工藝的にも研究対象として貴重なものも多い。最後に挙げられるのが、来館者からの寄贈品だ。代替わりや引越等で処分されてしまう大阪万博の思い出の品を広く募集・収集している。平成二十六年度の受入実績は約六一〇点。協会職員として、またパビリオン・ホステスや警備隊員として勤務していた方からの寄贈品には初見のものが多く、毎回驚かされる。こうした寄贈品はすでに単なる記念品ではなく、博覧会の歴史発掘のための貴重な資料となっている。

当時の芸術表現を再評価する動きも広がっている。近年進展があったプロジェクトを一部紹介したい。大阪万博の鉄鋼館には、テーマ「鉄の歌」を忠実に再現した楽器(音響)彫刻が展示されていた。フランス人の彫刻家フランソワ・バシエと音響技師のペルナル・バシエ兄弟が手がけたこの彫刻は、鉄やガラス棒、アルミニウム、ボール紙、ピアノ線などの素材で制作され、会期中に展示された十七基のうちいくつかは、来館者が実際に演奏できるものだった。バシエの作品は基本的な原理、形態を別にするれば、同様



鉄鋼館 STEEL PAVILION 1970年 提供:大阪府

のデザイン、形のものには世界にふたつとない。展示される場所に足を運び、その場所の固有性を作品に盛り込む表現方法は、サイトスペシフィック・アートの先駆けとも捉えられる。当時、この彫刻の一部を使用し、演奏家・高橋悠治が「エゲン」を、作曲家・武満徹が即興音楽「四季」を作曲。テープに録音され、鉄鋼館のスペースシアター(ホール)で多元再生によって演奏された。すべての彫刻は博覧会閉幕後に解体・保管されていたが、二〇一〇年の当館開館に際し

て「池田フォーン」を、次いで二〇一三年に「川上フォーン」「高木フォーン」を修復・復元。この修復には「川上フォーン」の名の由来となった川上格知、バシエのアシスタントを務め、スペイン・バルセロナ大学・大学院研究員のマルティ・ルイツが携わり、当館と京都市立芸術大学で講演と演奏会が開催された。同年、フランスにバシエ記念館がオープン。残りの楽器の修復・復元への積極的な取り組みや、東京国立近代美術館では本展の関連事業として演奏会やシン

ポジウムも予定されている。鉄鋼館での先端的な音楽表現は、現在まで国内外を問わず芸術家に影響を与えており、バシエの意志が継承されているといえる。

大阪万博で上映された映像の調査・研究にも関心が持たれている。一九六七年に開催されたカナダ・モントリオール万国博覧会では、映画手法を応用したパビリオンが多数設けられ、特に独特の映画手法と特産のガラス工芸を巧みに活かしたチエコスロバキア館に人気が集まった。一九七〇年の大阪万博でも映像を主体としたパビリオンが花開き、当時の思い出として三菱未来館や富士グループパビリオンの映像を挙げる来館者も多い。みどり館では世界初となる全天周映像「アストロラマ」が話題となった。直径三十メートルのドームに周囲三六〇度、上下二二〇度もの視野角で映し出される迫力のある映像は、『誕生』と『前進』の二部から構成され、上映機材はもちろん、ユニツトカメラと呼ばれる撮影機材も新しく開発された。『誕生』には舞踏家、振付家、演出家、俳優とジャンルを超えて活躍した土方巽が出演。北海道雌阿寒岳の原生林、硫黄山を背景にした撮影で、その身体表現の限界に挑んでいる。二〇一〇年、『誕生』のフィルムを調査を開始。実存している映画フィルムの一部はすでにデジタルデータ化されており、再上映に向けた動きも緩やかに進んでいる。また二〇一二年、長らく所在不明で



大阪万博での楽器(音響)彫刻展示の様子。手前が「川上フォーン」提供：大阪府

あった日本館の映像『日本と日本人』のフィルムが都内某所で発見された。市川崑が監督を務めた本作は、富士山を通じて日本と日本人の精神性を興味深く捉えている。こうした展示映像の保存、アーカイブの実現は、大阪万博の実験的な取り組みによる芸術性を鮮やかによみがえらせるだろう。

大阪万博のメインテーマは「人類の進歩と調和」。これを具現化するために、多くの建築家、芸術家、デザイナー、作家が携わった。磯崎新、黒川紀章、草間彌生、横尾忠則、亀倉雄策、福田繁雄、永井二正、手塚治虫、谷川俊太郎……。ユニフォームのデザインはコシノジュンコや森英恵。いずれも当時若手ながら、その実力を発揮する場が広く与えられたのだ。このほか、野外彫刻の制作に三木富雄、関根伸夫らが出演。具体美術協会による具体美術まつりでは《スペインコルル人間》《赤人間》など壮大なパフォーマンスが行われ、現代彫刻、現代音楽など、現代という名のもとに取り組みされた前衛的活動は「『明るい未来』として観客を魅了した。また大阪万博をきっかけに実現に至った技術をいくつか挙げたい。電気通信館で展示された「ワイヤレステレホン」は、自動車電話サービスやショルダーホンを経て携帯電話として、自動で身体を洗浄・乾燥してくれる浴槽・サンヨー館の「ウルトラソニック・バス(人間洗たく機)」は介護用浴槽として、また黒川紀章らが手がけたタカラ・ビューティリオンのカプセル住宅は、大阪に世界初のカプセルホテルを生んだ。日本館で模型が展示されたリニアモーターカーは、リニア中央新幹線として建設が進んでいる。現在も影響力を持つ建築・芸術家の関わりだけではなく、こうした技術的進歩の面においても大阪万博を通じた研究は多分野に広がっている。くわえて「万博マニア」と呼ばれる愛好家・コレクターの層が厚いのも大阪万博の特徴だ。関連資料の蒐集、移設されたパビリオンや展示品の記録制作、パークラフトやコンピュータグラフィックスでの会場全景の立体的な再現。彼・彼女らのなかで、まだ大阪万博は終わっていないのだ。

海外旅行がそれほど一般的ではなく、インターネットも普及していなかった時代。博覧会はまさに世界が集う祭りの場だった。博覧会の意義や位置付けも、時代とともに変わっていく。今年はいタリア・ミラノ国際博覧会、そして二〇二〇年にはドバイで国際博覧会が予定されている。大阪万博は現在も多くの人を魅了する、一九七〇年に輝く過去であり未来。だからこそ面白い。それをまるごと、展示資料を通じて次世代に伝えていきたい。

(EXPO'70パビリオン学芸員)